

この年代の指導者は、2つの責任がある

1つは現在の責任であり、目の前の選手のプレーの質を追求し、「目の前のゲームの質の高さを追求しながら勝たせること。」
もう1つの責任は選手の未来に責任を持つこと、育成年代の代表であれば「将来、A代表に何人の選手を入れることができるか。」である

勝つことと育てることは、矛盾すると同時に矛盾しない
その矛盾の間でコーチは生活している

～ イビチャ・オシム（前日本代表監督）

いよいよ待ちに待ったシーズンの到来です。今シーズンから3種（中学生年代）の大会は、リーグ戦を軸に行われています。毎週土曜日にゲームがあるので、前のゲームで見えた課題をトレーニングし、次の週のゲームで試すことができ、指導者としては選手の成長（停滞？）を常と感じることができます。今年から、一～三部制で対戦相手の力も均衡しているので、現在の自分のチームの戦力でも狙いを持ってサッカーをすることができています。

春の帯広のフェスティバルからチーム作りを始め、チームとしてやるべきことは見えてきました。（帯広では、高校のフェスティバルもあり、帯広K高のBチームやR高も見ることができました。やろうとしていることは、この年代の日本代表や釧路TCや我がチームとも変わりありません。「常に主導権を握るサッカー」で常にボールを保持し、失ったら奪い返しに行くサッカーです。ポゼッションのやり方やバイタルエリアの攻略の仕方は若干の違いがありますが、基本は同じでした。目指すべき方向性を共有している実感がありました。育成年代でやるべきゲームに大きな違いがないのは当然です。）狙いのあるゲームをしているからこそ、個々の選手が取り組むべき課題がわかり、トレーニングでそこを解消できるように練習できます。（非常に単純ですが、「止める」・「蹴る」の質にそれぞれ個人のレベルに応じた課題が見られます。基本的なパス&コントロールや5v3等のポゼッションのトレーニングの質がもう少し高まらないと選手も伸びないと感じます。選手も指導者も「忍耐」が必要なところです。）

ゲームになると選手は勝ちたいため（？）ミスを恐れて（？）課題にトライしないことがあります。目の前の勝利ばかり考えていて課題から逃げていては選手の成長はないので、指導者はゲームの勝利と選手の成長の間で揺れることとなります。また、試合になると狙いや考えもなく蹴られたキックで偶然にゴールを奪われ、負けてしまうこともあります。コツコツとボールをつないで組み立てていると尚更へこたれます。しかし、勝つためには相手の頭上を越えて蹴ってしまうのではなく、組み立ての「質」を上げていくしかありません。



指導者は勝利と育成の矛盾の間で生活しているのです。ただし、それを両立させようと思うのが指導者の宿命（プライド）かもしれません。